

# 英語教育は算数と理科で

川崎美智子・マリーインターナショナルスクール代表

英語教育といえば、コミュニケーション能力育成が大きな目標に掲げられるが、英語は「話す文化」であり日本語は「聞く文化」だ。だから、その両方に折り合いをつけて、コミュニケーション能力を高めるには無理がある。それなら英語教育で何を目標にすべきか。

まずは、英語を話された通り聞き取れること。聞き取った英語を日本語を介さず考えられるようになること。そして、自分の知っている範囲の英語で、意見をなるべく正確に伝えられることが、その主たる目的だと思う。

筆者が主宰する「マリーインターナショナルスクール」で、聞き取れる英語、考える英語、伝える英語を教えるにはどうしたらいいか試行錯誤をした結果、算数と理科に行き着いた。英語自体の持つ文化や英語圏の歴史背景を理解しない子どもに、物語を通して英語を教えるのは意外と難しい。また、子どもたちは友達でもない相手に会話などしないから、英語で会話を楽しむなどあり得ない。だが、自然科学なら答えが明確で見付けやすい。できたかどうか、聞き取れたかどうか、進度が自分でも分かるので動機付けにつながる。

■2014年(平成26年)6月6日 内外教育 第3種郵便物認可

## 五感で覚えられるメリット

子どもにとって役に立つ、楽しい英語を目標に、理科や算数を英語で教えて9年がたつ。教科書は日本のものを翻訳せず、外国の教科書を基に外国人講師と独自に作り上げた。日本人の生徒が興味を引くよう、また、外国人講師にポイントが分かるように作った。

英語で算数を教える利点は、書いてある式を見れば何が起きているのかが分かることだ。安心して授業が受けられ、英語の表現に集中し、考えながら聞ける。教えてみて分かったが、日本の算数教育は大変優れていて、大半の児童



英語による理科の授業



が、英語での算数はよく分かり、面白いと言う。

理科は簡単な実験をやり、五感を使って体験させる。そこに英語をかぶせていく。好奇心旺盛な子どもは、次に起こる事を待ちながら英語を聞くので、日本語を介さずとも自然に英語が入る。

そして最大の利点は、算数や理科には、子どもたちがゲームや遊びの中で使える表現がたくさんあることだ。例えば、1年生の算数には、数の概念で「Two is before three」や「after one」などが出てくる。また、理科では卵を割る「break an egg」、心臓がどきどきする「My heart beats」など、生活に密着した言葉が、実験や観察の中に出てくる。

五感で体験して覚えるので、一度では覚えられないとしても、覚えたら使うことができる。覚えるために習う英語ではなく、使えるための英語ということだ。初心者でも、このやり方で9カ月後ぐらいには英検5級に合格できる。

英語習得は、国際化の状況から見待たない。生徒にとって楽しく、生き抜く上でのツールとしての英語教育が、全ての子どもたちに公平に行われることを強く望む。そのためには明確な目標の下、小学1年生からの開始を願う。

大事なことは、カリキュラムを作る側がどれだけ子どもの立場に立てるか、また、新しい考え方で組織をグローバル化できるかに懸かっている。私どもの経験が役に立つならば、どこへでも出掛けて行って説明させていただきたいと思っている。

